

<研究ノート>

“らっつね”で語られる「浜の底力」の諸相

—’22-23プレ・フォロー社会調査実習（石巻市小湊浜）のストリンガー式調査より—

大矢根 淳*1・磯部慎一*2

Discover ‘Rattsune’: A Miyagi-Sanriku Dialect and Resilience in Kobuchi-hama, fishing village.

OYANE, Jun and ISOBE, Shin-ichi

要旨: 2023年度学部必修科目「社会調査実習 A」(大矢根クラス)は、東日本大震災復興をめぐって宮城県石巻市小湊浜をフィールドに設定して開講された。沈静化しつつあったコロナ禍下、夏休み二泊三日の現地調査実習合宿、プレ・フォロー調査(ストリンガー取材)で把握されてきた「浜の底力」の実例を、浜の方言“らっつね”の語義を読み解きつつ解釈していくことで、浜のレジリエンス(resilience)創成経緯、その基底(支援・受援体制)の内外要因が見出されて来た。

キーワード: らっつね、浜の底力、レジリエンス、ストリンガー、東西回廊

はじめに

本稿では、東日本大震災の被災地の一つ、宮城県石巻市・牡鹿半島の小漁村＝小湊浜における復興事情の長期的調査の過程で把握されてきた、「浜」独特の危機対応力(「浜の底力」とその基底・淵源(レジリエンス:resilience)の創成経緯を考えていく。

そこでまずは、本稿で取り組む社会学的な長期的復興過程調査の視角・認識枠組みを概説して(「復興」認識、コロナ禍下の「復興」事情調査方法論)、この’21-23調査(ストリンガー式調査)で把握されてきた「浜の底力」の発現例を紹介し、そこから得られた知見と次年度調査への課題をまとめる。

なお、本研究ノートは共著となっており、全体の概説(はじめに.)と理論的方法論的検討(1.)と、本稿の基本的視座(「浜の底力」への着目)について(2.)大矢根が、そして、現地調査の実際とそこで収集されたデータの紹介と分析について磯部が、まずは、浜の独特の言葉(“らっつね”)との出会いの経緯(3.)を示し、その語義を検討して(4.)、その語と内発的な「浜の底力」(レジリエンス)との連関について検討する(5.)。そこで「外との交流(癒しと祈りの東西回廊)」との連関(受援力)が来年度調査に向けての課題・仮説として浮

上してきたことを記しておく(むすびにかえて)。

1. 社会調査実習2017-2023年度のテーマと調査法

1-1. リベラルな長期的復興研究

災害社会学(的復興論)を専らとする筆者は、東日本大震災の発生(2011.3.11)に際し、個人的な前世紀からの積年の学びの地である宮城県石巻市小湊浜(牡鹿半島の所縁の地・お宅^{ゆかり})を訪ねて回り、被災からの復興に尽くす浜の記録(詳細は別稿:大矢根 2012~2021各年)を取り続けてきた。ここで私たちは復興事象やそれを捉える視角を以下のように措定してきた。

我が国においてはちょうど100年前に発生した関東大震災以降(1923年9月1日、発災)、「復興」といえばそれは「復興」の名を冠した公共土木事業(特に、復興都市計画事業と土地区画整理事業等)を指すこととして、そうした一義的な認識が広く日本に定着してきた(既定復興/災害パターンリズム。小林 2020a, 2020b)。しかしながら当時から、こうした都市計画中心の「帝都復興論」には強く異議が唱えられており、被災者の生活再建、生存権に着目すべきとの復興論＝人間復興論(福田 2012)が叫ばれていた。これを今に受け継ぎ論じられている一節を以下に引用する。

人間は、生存するために生活し、営業し、労働しなくてはならない。したがって、生存機会の復興を図るためには「生活、営業及び労働機会(これを総称して営

受稿日2023年12月9日 受理日2023年12月11日

*1 専修大学人間科学部教授

*2 元人間科学部兼任講師、フリーランス・ジャーナリスト、元NHK記者・海外特派員、キャスター

生という)」の回復が必要だ。…「道路や建物は、この営生の機会を維持し、擁護する道具立てに過ぎない」。だから、それらを復旧しても「営生の機会が復興せられなければ何にもならない」。(山中 2023)

前世紀末の阪神・淡路大震災後(1995)、そして21世紀に入って東日本大震災後(2011)も、復興事業が公共土木事業(土地区画整理等の都市計画事業)のみに傾斜していることが度重なり批判・糾弾され、その都度、福田徳三の人間復興論が取りざたされて、現在に至る(大矢根 2023a)。

さらに筆者は復興に関する社会学的調査研究の議題を、都市計画事業に係る作為阻止型の住民運動(区画整理反対運動)²⁾に収斂させるだけでは不十分であると考え、被災によって損なわれた社会関係の再構築過程に着目して、これを自身の「復興」研究の基軸に据えてきた(大矢根 2012, p.106)。

1-2. 研究・教育の視角・手法：社会調査実習 A の現地調査合宿

損なわれた社会関係の再構築過程を社会学的調査で把握するには、被災前の社会関係が把握されていなくてはならない。筆者は偶然に、1990年代初頭以来しばしば小湊浜をたずねて、そこに至る50-100年の度重なる津波被災(1896年明治大海嘯、1933年昭和三陸地震津波、1960年チリ地震津波)からの地区の復興過程について調査を行ってきた(大矢根 1993)。この度の津波被災直後、小湊浜の所縁のお宅を訪ねて再会し、その無事に安堵して、そこから本日まで10年余り、震災からの生活再建・地区復興の模様について、調査を続けている。

東日本大震災で、被災自治体として最大の犠牲者数を数えた石巻市では、市街地の広範な被害とともに、平成合併で市域に編入された旧町村部=離半島部(牡鹿町、雄勝町、北上町)の小さな浜・浦が壊滅的な被害を被った(大矢根 2011)。津波の被った地区は、将来再びこうした被害を繰り返さないために、全面的に人の居住が禁じられることとなって、そこは災害危険区域(建築基準法第39条)に設定された。浜の漁師達は何とか津波をやりすごして無事だったものの、その後の復興施策(災害危険区域設定)で終の棲家を(行政の復興施策によって)奪われる事態が発生している。復興災害(塩崎 2014)と呼ばれる事象である。石巻市の離半島部=牡鹿半島に3~40ある小漁村全てで災害危険区域が設定され広範囲に居住が禁止されたから、人口は激減し、生活の

痕跡が、そして地図からその地名までもが消されつつある³⁾。

しかしながら、小湊浜は被災後、その活気を取り戻しつつある。驚くことに、この浜は2023年晩秋現在、未だ瓦礫の撤去が完了していない⁴⁾。他地区同様、災害危険区域が幅広く設定されているから、そこには居住できないこととなっているが、居住用ではない番屋(作業小屋)の建築は許されており、それらが建ち並ぶ。未明から多種の漁に就く者(男性も女性も、外国人も)で浜には人気絶えない。多くは近くの高台(集団移転地)や市街地に住み、そこから浜に軽トラックで通う(通称、「通い漁業」)。小湊浜は、なぜ、こうも活気が漲っているのだろう。

こうした疑問を抱きながら、毎年数回ずつ浜を訪問し、様々なお話を伺ってきた。発災からしばらくは、ラポールを築く努力を重ねた。そしておおよそ5年を経た頃、東京から学生を連れて現地で合宿を張る⁵⁾お許しを得た。そこで2016年度から毎年、専大社会学科の2年生必修科目「社会調査実習 A」のフィールド実習地として小湊浜を位置づけ、夏休み前半・8月初旬に履修生10~20名を引率して現地調査合宿を実施してきた(毎年度報告書:『東日本大震災の生活再建と復興の今』=2017~毎年度、を参照のこと)。そこでは上記のとおり、防潮堤・高台移転地等の建設反対(作為阻止型の住民運動)の声をメインに拾うのではなく、浜の人々がそこで取り戻したいと切望する・この機に改めて涵養したい営生システムとは何か、様々な角度からたずねてきた。

調査実習合宿で浜を訪れるために、前期の授業は事前学習として、浜の100年の津波被災からの復興の履歴(明治大海嘯/昭和三陸地震津波/チリ地震津波)を学んだ。例年必ず、津波復興研究の古典である『津浪と村』(山口弥一郎, 1943=2011復刻)を輪読して、浜のレジリエンス創成の履歴を修得して現場に臨んだ。どこの浜にも必ずその一角に設えられている歴代の津浪碑や、集落の高台に鎮座する神社、それらがどのような経緯でそこにあり、そして浜の人々はそこに刻まれている戒めをどう護ってきているのか…、古典を繕きつつ現場の事情・その履歴を学んできた。

1-3. コロナ禍下の被災地調査(危険地域取材法の援用)

しかしながら、2019年度末(2020年2月頃)、世界的に猛威を振るったコロナ禍(COVID-19)により、あらゆる場面での人の接触が制限されたことで、この大学実習カリキュラムも深刻な影響を受け、現地調査の実施が

難しくなった。この機に筆者のクラスでは、危険地域の国際報道に就くジャーナリスト・磯部の協力を得て、実習合宿のあり方を模索し、そして何とかこれを実現しようとしてきた。生活危機を克服する浜の姿を調査しようとする実習授業である。津波復興災害（例えば、「^{ついで}終の^{すみか}棲家」）を復興事業によって奪われる漁師さんたち！）にコロナ禍が被る多重災害をどう乗り越えよう（「^{したた}強かに」「いなそうと」）としているのか、それこそを調査しなくてはならなかったのである。

コロナ禍真っ最中の2020年度、社会学科選択必修科目「社会学特殊講義F（国際地域社会の課題調査・議題設定）」（授業概要については、磯部2021参照のこと）を担当した磯部は、NHK国際報道の記者としての経験が長く、危険地域取材（例えば軍事政権下のミャンマーなど）のノウハウ・経験が豊富なことから、大矢根が依頼して、2021年度以来、社会調査実習の授業にゲスト講師（無給）として参画してもらい、コロナ禍下の現地調査の実現に向けてその体制をとともに検討・工夫してこれを構築してきた。具体的な手法の組み立て・プロセスは前稿（大矢根・磯部 2022、2023）に譲るが、コロナ禍下実習では、国際ニュース取材の現場に倣い、「ストリンガー式調査」と「プール式調査」（大矢根・磯部 2022, p.82）を導入して、学生調査体制を組み立ててきた。

毎年夏休みの調査実習合宿に向けて、教員によって事前準備の現地行脚が行われる。そこで、当該年度の学生によるインタビューの対象者とおおかたのアポイントメントをとる（プレ調査）。そして夏休みの実習合宿の後、秋口に、合宿時の学生インタビューのお礼とインタビュー・テキスト化原稿の校正依頼（学生から郵送で送付依頼）への対応をお願いして回り、その際に、学生・教員が当該年度のインタビュー等で把握した事象に関わるフォロー調査を行うこととしている。

2. コロナ禍下だからこそ把握し得た「浜の底力」

2-1. “らっつね”との邂逅

2021-23年度、コロナ禍下、磯部が東北・山形在住のストリンガー（現地事情通でもある取材記者）として、上記の実習合宿に際して、いわゆるプレ調査あるいはプレプレ調査、そしてフォロー調査で石巻各地を探索して、小淵浜でも多くのインフォーマントに出会うこととなった。磯部によって、大矢根が過去数10年で得てきたインフォーマントとは異なる地層が見出されてきた。大矢根は、被災から浜の復興に向けた動きを、生業である

漁業、特に、季節に即して多様な漁種を貪欲に組み合わせさせて協働（しつとも激しく競争）する姿を追ってきたが（大矢根 2023b）、磯部は町議会議員、区長経験者といった行財政施策に詳しい者や、新旧時代それぞれの新産業の担い手、浜の実力者、例えば新しい養殖（ワカメ）やその6次産業化の担い手などを、スノーボール・サンプリングで次々に掘り起こした。あるいはまた、女性事業主が、ワカメ養殖（海の農業！）と並行してキラゲ栽培（陸の番屋での施設栽培・農業）に取り組んでいて、新たな浜の名産となりつつあること、こうした浜復興を逞しく豊かに下支えする諸事業・活動主体を次々に掘り起こして、新たなインフォーマントを獲得してきた。

その過程で出会ったのが“らっつね”という表現であった。「とりとめのない」「とっちらかっている」「秩序なくめちゃくちゃ」といった含意を有する方言だが、平時においても工夫を凝らして死に物狂いで競争社会を生き抜く、そして場合によっては規制ストレスの際どころを攻めていく、そうした日々の奮闘努力の姿やその心持ちを表した言葉である。

2-2. “らっつね”の基底としての「浜の底力」（≒レジリエンス：resilience）

ここでは浜で“らっつね”が発現するその基盤について、それを「浜の底力」として考えてきた災害社会学領域の検討の経緯を記しておきたい。

「浜の底力」は、NHK・TV番組（2003-9年度放送）「難問解決！ご近所の底力」から、筆者らによって連想されてきた表現である。同番組は、「地域が抱えるさまざまな問題を、地域の人たちと一緒に解決する視聴者参加番組で、『住宅街の防犯』『町の落書き』『ゴミの分別』など、町内会・自治会の課題から『棚田の復活』『森林の保全』といった環境問題まで幅広く取り上げ」てきた⁶⁾。

同時期、災害社会学領域では米国・ハリケーンカトリナ（2005年）の復興研究以来、レジリエンス（resilience）が重要な概念となってきた。筆者らリベラルな災害社会学サイドではこのレジリエンス概念を輸入して、以下のように咀嚼・翻訳してきた。

復元=回復力（resilience）概念は、いわば大状況のなかでの客観的な環境と条件を見る過程では見逃しがちな、地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力などに目をむけていくため

の概念装置であり、それ故に地域を復元＝回復していく原動力をその地域に埋め込まれ育まれていった文化のなかに見ようとするものである。(下線筆者。浦野ほか編 2007, p.40)

その後、我が国では、'2011東日本大震災発災以降、政権の座に返り咲いた自民党が、大胆にもこのレジリエンスを「国土強靱化」と異(誤)訳してみせて、さらにこれを政府公報として世界発信したことで、日本政府の訳として「国土強靱化」が広がることとなったが、しかしながらその訳語はそもそも建築業界用語であることをここで指摘・確認しておきたい。レジリエンスの正訳は、米国の人文・社会科学界におけるその出自を辿ると「復元＝回復力」(大矢根 2013)である。

さて、正訳に沿って、被災前に当該地区で育まれていた結束力・コミュニケーション能力、問題解決能力に着目してみると、小湊浜には実に豊かに、レジリエンスが積層していたことに気づかされる。浜のレジリエンスとは、(政府の喧伝するような)被災後に施工された高さ14m防潮堤(ハード施設)のことを指すのではなく、20mの津波を強かにいなしてきた智慧とそのノウハウ、それらが連続と受け継がれる地区体制・生活構造そのもの(ソフト施策)にあることが分かる。これらを私たちは「ご近所の底力」と呼んだ。

浜の被災から10年余り、被災後の浜の取り組みや、それが産み出されて来た生活・社会基盤とその歴史、これらを少しずつ様々な方にうかがってきた。以下、項目をいくつか挙げておく(詳細については、大矢根 2023 b、を参照のこと)。

被災前

○漁の合間には内陸・山形に湯治に赴き、現地の方々と交流を重ね、結果的に、支援―受援の確固たる関係性が形成されていた。

○各漁家のライフステージに合わせて、その成員が他家の飯を喰いながら次々に新たな漁種を体得して、季節の漁のバリエーションを増やしてきた。

○浜のあちこちで女性が次々に事業主となって起業し、6次産業化の事業主となっている。

○200海里規制(1977年)で遠洋が閉ざされても、「浜の農業(養殖)」にトライして新たな漁種を獲得した。小湊浜には不況でも200海里規制でも震災でも、いつでも働く場があった。

○漁協を介さず自身で6次産業化は完遂しているが、

漁協の相互扶助(時化や座礁に際しての沈没船の捜索や引揚、そしてそれに関わる慶弔についても)の基盤は必須と認識していて脱退はしない。

被災直後

○3.11当日は、浜の御大(阿部市太郎さん)の掛け声に即応して「船の沖出し」を完遂し、浜に残る者は皆、高台に駆け上り避難した。禁じられていても生業の糧である船を守るのは漁師の法だ。

○浜の私設避難所20班:津波で家を失った者を自宅の部屋や納屋を開放して、お盆明けまで半年ほど無償で収容し続けた。全て班員が自前の物資で賄った。

○被災半年後＝お盆明けに浜の漁は再開されたが、すぐにそれは休漁とされ、自船の網で港内外の瓦礫すくいが始められた。船を失った他家の船員を同乗させて、瓦礫撤去労務費を稼がせるためだった。

復旧復興期

○津波で消失した浜の自宅の跡地が災害危険区域となって居住禁止となった者は、漁業権を喪失しないように、市街地に居を構えても住民票は移転せず、毎日一時間弱、軽自動車で浜に通う(通い漁業)。

これらは「浜の底力」のもとで産み出されて来た出来事的一端で、“らっつね”はそれらの現場の慌ただしい事々に参画する自らの姿を形容する言葉として、浜の人々の日常会話の中で使われてきた。浜の生業・生活構造(その中で育まれて来た地区の社会関係)で生活危機を「強かに」^{したた}「いなす」、そうした「浜の底力」のシステムは強靱だ。地区で歴史的に内発的に構築されてきたこれら強靱な態勢がレジリエンス(の基底)であり、私たちはこれを「浜の底力」と呼んできた。

3. “らっつね”が織り成す「生きる力」・「浜の底力」

3-1. 小湊浜の「生きる力」・“らっつね”との邂逅

ここね、『生きる力』っていうのかな、他と比べるとね…ここは。自分から何とかしなくては、という意識が…。いい言葉でいうと、そういう感じだけど、悪い言葉だと、“らっつね”ってわかるかな?(2022年11月18日)⁷⁾

去年秋、小湊浜を見渡せる高台の事務所で、「牡鹿半島を最も知る男」が、それまで筆者と大矢根が耳にしたことのなかった言葉を繰り出した。

筆者がこの浜を訪れるようになって4年余り。その

時、この言葉との出逢いが、牡鹿半島で最も活気がある小湊浜の謎を解く大きな一歩になると、筆者は知る由もなかった。

「浜の底力」に通じるキーワード、“らっつね”を授けてくれたのは行政区長の大澤俊雄さん（71）だ。漁師の四男として地元で生まれ育ち、現在、牡鹿半島でただひとつの自動車整備工場を営むかたわら行政区長を務めている。大澤さんは、かつて合併前の牡鹿町で町議会議員を2期務め、今年4月まで牡鹿半島の区長会の会長職にも就いていた。大澤さんは、はにかみながら、でも自慢気に「商売柄、半島で私を知らない人はいないですよ」と話す。

その大澤家は、東日本大震災の5年ほど前、自宅と整備工場を山の斜面を切り拓いた高台に移していたため津波被害を免れた。大澤さんは津波で家屋を流されてしまった浜の人たちを自宅や整備工場に受け入れ、水⁸⁾や食料を分け合って共に被災生活を送った。そして、発災時に浜を離れていた当時の区長に代わり、私設の現地災害対策本部を立ち上げ、浜にできた別の19の私設避難所との連絡調整役や、半島の外からの物的・人的支援が届くようになってからはその仕切り役を担った。

3-2. コロナ禍下の現地入りが引き寄せたインフォマーントの輪

“らっつね”との邂逅は、コロナ禍下でも現地に入ることを諦めず、調査（取材）を重ねたことで実現した。2021年度、社会調査実習A（大矢根クラス）では、ストリンガー式調査・プール式調査に、インターネットのオンライン会議システム（例えば、Google ClassroomのMeetなど）による同時生中継を組み合わせることで現地の人たちの声を聞き、報告書を取りまとめた。そして行動制限が緩和された2022年夏からは、前年の手法を継続しつつ宿泊を伴う調査実習を再開した。履修生は「自分で歩き、探し当てた人にお話を伺う」インタビュー実習にも取り組んだ⁹⁾。その結果、履修生と筆者は、小湊浜でカキとワカメの養殖を手掛けている阿部水産を切り盛りする幸恵さん、妹の明美さん、そしてご家族とつながった。さらに明美さんの橋渡しによって前述の大澤区長や、後に紹介する浜の長老のひとり、小湊浜に海苔やワカメの養殖技術を最初に持ち込んだ阿部盛^{さかり}さんと出逢えた。

こうした見知らぬ土地で、事情通を探し、信頼関係を築きながら情報源を次々に開拓していく取材法は、社会調査というスノーボール・サンプリングと共通する。コ

ロナ禍に怯まず現地に入り続けることで、「浜の底力」を知る新たな一歩が踏み出せた。

4. 「生きる力」と“らっつね”

4-1. “らっつね”の語意

大澤さんは“らっつね”を「とりとめがない」と置き換える。そしてこの言葉を、彼はいつも笑い声とともに、少し卑下するような感じで使う。ただ、この言葉は、調べようにも辞書に載っていないため検索エンジンに頼^{すが}って見たところ、宮城県・南三陸町観光協会が運営する「南三陸観光ポータルサイト」の地域の方言をまとめたウェブサイト¹⁰⁾にたどり着いた。そこには、「らっつね＝散らかっている」という記述があった。

“「散らかっている」のが「生きる力」？ どうもしくりこないといいながら、大澤さんがいう「とりとめがない」を手がかりに辞書や辞典を繰っていった。すると、仏語とのつながりや、「埒^{らち}が明かない」や「埒もない」という言葉との関係性が見え、音の響きから、「らちもない」が“らっつね”に転じた可能性が高いことを見出した。加えて「秩序がなく、乱雑である」とか、「めちゃくちゃでばかばかしい」という意味もこの言葉に含まれると考えるに至った。これらは大澤さんが口にした悪い言葉とも符合する。

4-2. “らっつね”と浜の人たちの“自己認識”

それにしても、なぜ、“らっつね”が「生きる力」なのか？

筆者と大矢根は、これまで小湊浜の人たちに、浜の活気の源や、特徴、さらに他の浜との違いについてたずね、その表現や言葉を記録してきた。今回、それらを“らっつね”と照らし合わせてみた。

浜の人たちが最も多用するのは「負けん気¹¹⁾がある」とか「競争心が強い」といった表現で、そのほかにも浜の人の気質や気性、他者や仕事との向き合い方に関わっている。

4-3. 浜の人たちの生業と“らっつね”

小湊浜は漁業と養殖業に適した浜だ。牡鹿半島・金華山の沖合は黒潮と親潮が交わり、水産資源に恵まれることから、世界三大漁場のひとつとされる。

ただ、そんな小湊浜も、戦後、昭和にかけては半農半漁の家が多かったという¹²⁾。その後、ワカメやカキの養殖が盛んになったことで人口（居住人口、関係人口）が増え、今、震災によって280人ほどに半減してしまった

(被災前576人。アーキエイド2012, p.88) もの、人々は、地先漁にワカメやカキの養殖、アワビやウニ、ナマコの採取など、季節ごとに漁や養殖を組み合わせる収入を得ている。

阿部水産の明美さんは、ワカメやカキの養殖は牡鹿半島のどの浜でも出来るわけではないと話す。

こっちの浜は、表浜って私たちは言うのね。反対を裏浜ってって表と裏とで丸つきり違うんだよね。例えば採れるもの、表の方はこの辺は養殖がいいよ、みたいな。海水温も高くて、反対の方は裏浜っていうんだけど、谷川とか寄磯浜は水温が全然違うので採れるものも違って。(ワカメやカキの) 養殖はNG。ホタテとかホヤ(なら養殖できる)という感じで全然違う。(2022年8月8日A)

一方、戦後まもなく小淵浜でノリの養殖を始め、現在小学生のひ孫まで4世代で暮らしている阿部盛さん(89)は、小淵浜の活気を次のように説明する。

小淵はね、金とれるから人がいるわけだよ。金とれないところに人はいられない。自画自賛するようだけど、私、海苔やって70年ちょうどなのね。ワカメ産業したっていうのも私。昭和44年ごろで、オイルショックが44年だったかなあ、そのころに自分で種をとってワカメをやったのは、初めてなんですよ¹³⁾。水産試験場の先生方に教を乞うて。(小淵浜は) ワカメが、養殖が、適した海区なんだね。そのために、カネがとれるから人がいるってことです。(2023年6月30日)

4-4. 浜の特徴：負けん気・競争心・独立心

小淵浜の特徴を、石巻の旧市街地出身で、浜の漁師の家に嫁いできた小池ひとみさんに伺った。小池さんは夫と息子が底引き網漁の漁師で、義父の発案で営むことになった民宿「あたご荘」の女将を務めている。

浜の者は**立ち上がる力**って結構どこも強いのですけれども、この部落は結構、あの、なんていうの、個々の**競争心**ってのが**すごい強い**部落で。「あそこに**負けていられない**」とか、「あそこがやっているから、うちもやらなきゃ」とか、そういう地域性があるんですよ、昔から。(2022年8月8日B)

一方、大澤さんも、他の浜にはない「すごいところ」と

指摘したうえで、人々の仕事への向き合い方を例にあげる。

「同じ船もっていても、人に**負けたくない**。(波が高く、漁に) 誰も出なくても漁に出るとか。もう昔から。昔からずっとそのまま。」(2023年10月27日B)

漁業者自身はどのように表現するか。震災からの復興についてインタビューしている学生と、阿部水産の幸恵さん(Y)・明美(A)さんとのやりとりをみてみよう。

学生：漁業とか、養殖業を立て直すにあたって、近所とか、親しい人とか友人の方とかと協力したことは何だったのでしょか？

Y：協力したことっていかさ、この浜の人たちは**勝気**だからさ。

A：(笑) あそこの家には**負け**ない、隣には**負け**ないみたいな…。

Y：他の浜はさー、手をつないでみんなで一歩、みたいな集落なの。ここの浜は、「いや、俺は**一人でも勝つ**」みたいな人がほとんどなの(2023年8月7日B)

さらに幸恵さんは、勝つために必要なことを指摘する。

Y：この浜は、よい道具を持ってるの。作業用の機械にはお金をかけて備えているの。ワカメにしてもカキにしても。もう最先端の道具を使って…(2023年8月7日B)

季節ごとに獲物や養殖の対象が変わるため、道具や機械を揃えたり、更新したりする経費がかさむ。養殖は数千万から億の収入につながるというが、同時に千万円単位の借金を背負うことが前提になることも珍しくない。だから稼ぎ続けなければならないのだ¹⁴⁾。

阿部水産では震災後、養殖カキとワカメの合間、春から夏の時期に、空いている作業場でキクラゲの栽培を始めた¹⁵⁾。こうした人より多く稼ぐという仕事への向き合い方¹⁶⁾からは、浜全体が、まとまっているという印象は薄い。区長の大澤さんは、役所主導のイベントや防災訓練を例に浜の人たちのまとまりのなさを説明する¹⁷⁾。

(スポーツイベントへの参加を呼びかけても) 小淵では、「なに？オラ稼ぐの忙しいから」って誰も集まんないからね。小淵は遊ばない。(2023年6月30日)

こんど11月5日に石巻市全体で防災訓練やるのね。「どうしますか？」って（役場が訊ねて）くるのね。「そんなの忙しくてやってられない」って（みんな言ってます、と私は答える）。わははは。（2023年10月27日 B）

4-5. 「秩序なく」、「めちゃくちゃ」に映る浜の仕事、働き方？

では、「秩序のなさ」、「めちゃくちゃ」も、小淵浜の人たちにあてはまるのだろうか。

浜の人たちとの接触を重ねるうちに、ワカメの養殖には公然の秘密があり、それこそが「無秩序」に直結することが明らかになった。

公然の秘密とは、取り決めが守られない実態だ。複数の関係者によると、ワカメを育てるために海に沈める台は、兼業30台、専業40台と定められているのに、実際には倍以上、中には100台以上出す業者もあるという。超過する1台ごとに（漁協に）支払う罰金の額が、その数十倍になる水揚げ（売上）に比べれば、痛くも痒くもないというのが理由だという。これは傍から見れば、「秩序などなく」「めちゃくちゃ」だ。

5. “らっつね”な小淵浜の受援力の基底

5-1. 競争と内輪のまとめり

競争に勝つため、人より多く稼ぐために、取り決めも事実上無きものとする“らっつね”な浜の人たちが、なぜ、震災を乗り越えられたのだろうか？ 調査を進めると、浜の人たちは非常時には、足りないコトやモノを補い合っていることがわかった。

その一例が、大矢根が冒頭に記したこの夏、96歳で亡くなった浜の御大、阿部市太郎さんだ。10月27日、大矢根と筆者は故人が暮らしていたお宅をたずねた。仏壇に手を合わせ、大矢根がかつて故人にお話を伺ったときと同じ、窓の外に浜をのぞむ居間で、長女の幸子さんに話を伺った。夫、正美さんが帰宅して座に加わると、話はアナゴ漁の船を沖に出す際の決めごとや、縄を入れる駆け引きなどに及んだ。すると幸子さんが、出漁前に家族総出でするエサ詰め作業の写真を手に、こんな話をしてくれた。

こうやって2艘並んでエサ詰めしていて、うちで早く終わって（漁に）出るでしょう、ここで（ほかの家が）まだ（エサ詰め）していると、ここ（船）に乗って行って、みんなお互い手伝って。この浜はそういうのが多いです。（2023年10月27日 A）

負けん気の強い人たちが、競争相手に手を貸すというのだ。正美さんが間髪入れず「船に乗せなかったり、渡らせなかったりするところもある」と指摘しており、誰にでもではないようだ。反りが合う家や人が不利な状況にあるのを放ってはおかないという、内輪の支援・受援体制の存在が伺える¹⁸⁾。

5-2. ライバルに手を貸す事情・背景

小淵浜の人たちのこうした二面性は何に基づいているのだろうか。大澤さんが解説してくれる。

昔からこの地域っていうのは、もともと給分っていう隣（の浜）が本家なのね。この小淵地区っていうのは、別家。結局、次男、三男坊、四男坊が多いから、この地域に来て、この別家で大きくなっているね。だから「生きる力」っていうのはこっちの方は強い。（2023年8月7日 A）

一方、小淵浜の人たちは、そもそも行政を頼らない、当てにしないと大澤さんは言う。

この地区だけ行政は無関係、この地区の隣の十八成（浜）とか、鮎川浜とか、あっちの地区は、何かあっても行政を（頼）って、待ちだけなの、「なんとかしてくれる」って。うん、まるっきりこと違うんだから。（2022年11月18日）

阿部水産の幸恵さんも、浜の行動の基本は、自分が動くこと、だから稼ぎにつながると言う。

何かするっていうときは、みんな協力はもちろんするけれど、それ以外は、やっぱり自力でみんながんばる。（それで）この浜は特別活気がある。だから水揚げ高もすごく良い。（2023年8月7日 B）

この「何かする」、「みんな協力」が、東日本大震災という脅威、非常事態に直面したことで発動した。小淵浜では、津波で流されてしまったワカメの養殖に必要な道具類を、海外とつながりがある浜の人¹⁹⁾の伝手で取り寄せ、震災の年の秋には養殖を再開して、翌年春の収穫につなげた。阿部水産の幸恵さんと明美さんは、それが今の仕事、暮らし、復興の実感につながったと強調する。

幸恵（Y）：震災後、誰もが浜での生活はできないと感

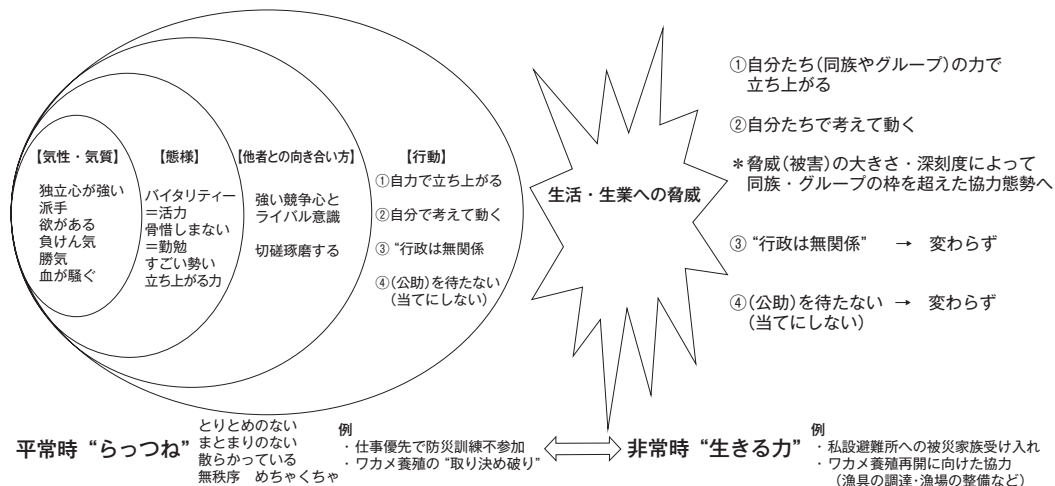


図1 小浜の人たちの特徴を示す言葉でみる“らっつね”と「生きる力」

じていた。国内で漁業資材も不足していた時、海外から資材を入手して10月にワカメの種付けができたことで生活の基盤を手に入れ、地元に残ることができた。これができなかつたら、ここには居なかつたと思う。生活の基盤となるワカメ養殖ができたことが復興につながつたと思います。

明美 (A) : 普通に生活できるのが復興なのかもしれないしね。何もなかつた時に比べれば。こうやって働けて一日があつという間に終わって…

Y : 忙しすぎるから、あつという間に終わんの。ふふふ。まあ、それが復興だよなえ。

A : 復興というか、それが当たり前なんだけど、それはやっぱり一番なのかなあつていうのは思う。

周りから見たら、やっぱり建物がね、きちんとなれば復興とかがついているいろいろあるんだろうけど…。

それだけではないよね。自分の気持ちの問題だよな、やっぱり。自分の仕事もないとき、満たされないからなあ。(2023年8月7日B)

生活と仕事を脅かす未曾有の脅威にさらされ、小浜浜では、“らっつね”が暫定的に解除され、支援と受援を伴う「生きる力」、「浜の底力」が発動して、浜の人たちは、仕事(生業)と生活を取りもどし(徳田の説く「営生機会の復興」)、今、また“らっつね”で働いているのだ。

むすびにかえて

～次年度に向けての課題と仮説：小浜浜の受援力の基底と、癒しと祈りの東西回廊

コロナ禍下でも現地調査を続けた結果、本稿で紹介した小浜浜の支援・受援の体制をさらに増強させる要因と

して、浜の人による積極外交の存在が新たに明らかになりつつある。

東日本大震災当時、公の支援が届かない中、津波で家を流された人たちが身を寄せあつた高台の個人宅＝私設避難所では、浜の身内の支援・受援を基礎に、震災前から個人や家族ベースで牡鹿半島の外、特に山形県や宮城県内陸部の人たちとの間で積極的に構築・維持されてきた支援(緑)・受援(緑)の関係があつたからこそ、浜の底力が発揮されたことが伺える。

この積極外交の経緯を調べ始めたところ、海の民と山の民は、古の時代から、地域を東西につなぐ街道(東西回廊)と、信仰の対象である霊場²⁰⁾、そして癒しの場所としての湯治場によってそれぞれが引き寄せられ、そこでの出会い、それら積み重ねが、現代の支援・受援の関係をもたらすことになつたのではないかという仮説を見出すに至つた。今後は、こうした歴史的・精神的なつながりも含めて、小浜「浜の底力」の構成を明らかにしていきたい。

付記：本稿校正中、能登半島地震(2024年1月1日)が発生した。被災した孤立集落では続く余震・極寒の厳しい状況下、諸避難態様において地区の「底力」が様々な発揮されつつあることも漏れ聞く。

生活、地区の回復を祈念する。

参考文献

◇阿部幸樹 2020『東日本大震災を踏まえた津波に対する漁業地域のレジリエンス向上方策に関する実証的研究』(北海道大学博士論文：工学)。

https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/

- 78351/1/Kouki_Abe.pdf
- ◇アーキエイド 2012『浜からはじめる復興計画』彰国社.
- ◇出羽三山神社『出羽三山の沿革』 <http://www.dewasan-zan.jp/publics/index/6/>
- ◇遠藤匡俊 1982「漁業紛争からみた近世村落の相互関係—牡鹿半島を例に」『東北地理』34-2.
- ◇福田徳三 2012『復刻版 復興経済の原理及若干問題』関西学院大学出版会.
- ◇田田武士 2018「漁業者集団の共同性—アワビ漁を事例に」『地域社会学年報』第30集.
- ◇樋口直人・中澤秀雄・水澤弘光 1998「住民運動の組織戦略—政治的機会構造と誘因構造に注目して」『社会学評論』49巻・4号.
- ◇磯部慎一 2021「国際ニュース取材の実際と社会調査の学修をめぐるリスクと可能性：社会学特殊講義F（国際地域社会の課題調査・議題設定）講義ノートより」『専修人間科学論集 社会学篇』No.11, Vo.2.
- ◇岩鼻通明 2003『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院.
- ◇岩鼻通明 2017『出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く』岩波書店.
- ◇加瀬谷澄 1978「明日を担う若者たちと」『東北学院時報』第345号.
- ◇金華山黄金山神社公式HP <https://kinkasan.jp/> 同内「由緒」 <https://kinkasan.jp/about/yuisyo/>
- ◇小林秀行 2020a『「復興とは何かを考える連続ワークショップ」の展開と到達点—「復興」とはいかなるものなのか—』『日本災害復興学会論文集 第15号特集号「復興とは何か」』.
- ◇小林秀行 2020b『「災害復興」の含意をめぐる一考察』『日本災害復興学会論文集 第15号特集号「復興とは何か」』.
- ◇宮城県『宮城県の伝統的漁具漁法』
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/suishin/dentoutekigyogugyohou.html>
- ◇宮城県水産試験場 1989『宮城県の伝統的漁具漁法 地域編（Ⅱ）中部地区』.
- ◇宮城県 1994年『宮城県の伝統的漁具漁法Ⅶ養殖編（かき）』.
- ◇宮城県 1995年『宮城県の伝統的漁具漁法Ⅷ養殖編（わかめ・こんぶ）』.
- ◇宮城県（作成資料）『宮城・山形両県の概況』
https://www.pref.miyagi.jp/documents/22539/671787_1.pdf
- ◇農山漁村文化協会 1994『江戸時代 人づくり風土記④ふるさとの人と知恵 宮城』.
- ◇大崎市『海・山・平野手を取り合って～3.11でつながる縁～』.
<https://www.city.osaki.miyagi.jp/material/files/group/22/69089313.pdf>
- ◇大矢根淳 1993「津波の民俗」『宮古市史 民俗編（下巻）』宮古市.
- ◇大矢根淳 2011「復旧・復興・再生への‘絆と連携’」（専修大学社会知性開発研究センター・2011年度シンポジウム「復旧・復興・再生への‘絆と連携’：学内パネル展示」）.
<https://www.senshu-u.ac.jp/scapital/201107sympo/201107sympopanel.pdf>
- ◇大矢根淳 2012「東日本大震災における集落再興」『都市社会研究』.
- ◇大矢根淳 2012-2021「東日本大震災・現地調査の軌跡 I—X」『専修人間科学論集 社会学篇』No.2-12, Vo.2.
- ◇大矢根淳 2013「復興、防災社会構築におけるレジリエンスの含意を考える」『月刊公明』第90号.
- ◇大矢根淳 2023a「復興災害への社会的応答—東日本大震災にコロナ禍が被る多重災害（事前復興災害）の現場で—」国際シンポジウム=第七届灾后重建历史社会学及社会治理国际研讨会（2023.11.24 於中国・成都：四川師範大学全球治理与区域国別研究院）.
- ◇大矢根淳 2023b「復興ヘゲモニー更改=復興ガバナンス ver.2.0へ—石巻市小湊浜における『浜の底力・強かさ』」『災害復興研究』Vol.14.
- ◇大矢根淳・磯部慎一 2022「コロナ禍下・実習教育の可能性を探って：社会調査実習におけるオンライン併用ストリンガー／プール取材法」『専修人間科学論集 社会学篇』No.12, Vo.2.
- ◇大矢根淳・磯部慎一 2023「コロナ禍下・持続可能な現地実習（フィールドワーク）をめざして：次のパンデミックを強かにいなす試み；現地協力者・実習生の受け止めと汎用化の課題」『専修人間科学論集 社会学篇』No.13, Vo.2.
- ◇田中啓爾 1957『塩および魚の移入路 鉄道開通前の内陸交通』古今書院.
- ◇浦野正樹ほか編 2007『災害社会学入門』弘文堂.
- ◇山口弥一郎 1943=2011（復刻）『津浪と村』恒春閣書房（三弥井書店）.
- ◇山中茂樹 2023『人間の復興』関西学院大学出版会.
- ◇「交流が生む災害時支援」『河北新報』（2006年5月21日）.

付：小湊浜関係者とのインタビュー経緯（2022年8月～2023年10月）

- ・インタビューの音声をICレコーダーで収録し、後日テキスト化した。
- ◆2022年8月8日 A（社会調査実習）阿部水産・阿部幸恵さん+明美さん 学生4人 於阿部水産作業場
コロナ禍の行動制限緩和で再開した宿泊を伴う現地実習。ワクチン接種やPCR検査をして訪問したことを説明し、マスク着用で実施。
- ◆2022年8月8日 B（社会調査実習）あたご荘女将・小池ひとみさん 学生11人 於あたご荘
食堂で夕食後、浜の人たちがどのように漁業を再開したか、その原動力は何だったのかなどを聞いた。
- ◆2022年11月18日 小湊浜区長・大澤俊雄さん 磯部（大矢根オンライン参加）於牡鹿モータース事務所
浜の底力の謎解きにつながる地元の言葉‘らっつね’を授けてくださった。大矢根は専修大学生田キャンパスからGoo-

gle Classroom で参加。ストリンガーによる現地生中継と収録。

◆2023年5月26日 小浜区長・大澤俊雄さん 大矢根・磯部 於あたご荘

夕食を共にしながら隣の女川町にある東北電力女川原子力発電所の裁判について、腕利きの漁師、阿部市太郎さんの話、震災後のワカメ養殖再開までの経緯などについて聞いた。

◆2023年5月27日 A 阿部水産・阿部明美さん 大矢根・磯部 於阿部水産作業場

キクラゲ栽培を控えた作業場の一角で実施。人手不足の問題や、ワカメの収穫前後の作業、海水温の違いと品質についてなど幅広く聞く。

◆2023年5月27日 B 阿部盛さん(阿部明美さん同席) 大矢根・磯部 於阿部盛さん宅

海苔の養殖で財を成し、浜にあった自宅は津波で流されたものの、高台に自力移転して現在4世代同居で暮らしている浜の長老のひとり。浜の成り立ちや原住民とされる3つの家系の話、分家の進み具合、半農半漁だった昭和の頃の話など、震災前のゼンリン住宅地図と照らし合わせながら伺った。

◆2023年6月30日 小浜区長・大澤俊雄さん(小池ひとみさん一部同席)、大矢根・磯部 於あたご荘

女川原発の再稼働をめぐりNHK仙台放送局が制作し、大澤さんも取材を受けたニュース特集番組について、また、震災当時、高台にある大澤さんの自宅や整備工場に津波で家を流された人々を受け入れて共に送った避難生活や大澤さんの役割などについて伺った。

◆2023年7月1日 阿部盛さん(小池ひとみさん一部同席)、大矢根・磯部 於あたご荘

あたご荘の女将の夫と息子の底引き網漁が一段落した話から湯治の話に転じ、故阿部市太郎さんが湯治場で育んだ山形や県内各地の人たちとの交流について、山形県内の信仰の山、湯殿山の話や牡鹿半島の霊場、金華山や半島にある寺の話も伺った。

◆2023年8月7日 A(社会調査実習) 小浜区長・大澤俊雄さん 学生代表3人 於牡鹿モータース事務所

ストリンガー(磯部)の紹介で、プール型調査として学生代表3人が伺い、浜の人の特徴、負けん気などについて話を聞いた。なお、ストリンガーを介して実施したインタビューはすべて、学生が対象者に事前に挨拶状と質問項目案を郵送した。

◆2023年8月7日 B(同上) 阿部水産・阿部幸恵さん、明美さん 学生代表3人 於阿部水産作業場

キクラゲの出荷作業に忙しい中、時間を割いていただいた。学生は袋詰めの手伝い作業を手伝うことになっていたが、話に夢中になり、作業は進まなかった様子。

◆2023年8月7日 C(同上) あたご荘・小池ひとみさん 学生12人が参加 於あたご荘

夕食後に感染拡大防止対策をとり広さ20畳ほどの食堂で実施。聞き手は学生代表3人、震災後、住民が石巻市街地に流

出して子どもが減って寂しくなったことや津波の難を逃れた時の話などを聞いた。

◆2023年8月8日 A(同上) 阿部盛さん・学生代表3人 於あたご荘

盛さんは学生の質問項目案に関わることを丁寧に調べて臨んでくださった。若い世代が震災後に浜をあとにした理由や、住宅の高台移転の影響、ワカメ養殖業の最近の事情などについて聞いた。

◆2023年8月8日 B(同上) 阿部水産・阿部幸恵さん、明美さん、学生代表4人、於阿部水産作業場

学生4人の要請による追加インタビュー。前日分と一部重複する質問があったにも関わらず、丁寧に答えてくださった。

◆2023年10月27日 A 阿部幸子さん+正美さん 大矢根、磯部 於故阿部市太郎さん宅

アナゴ漁の準備で作業に手間取る家の手伝いをするのも珍しくないという話や、父親の故市太郎さんが湯治場に出逢った山形県や県内各地の人たちとの長年のお付き合いが震災時の支援につながった話などを伺った。

◆2023年10月27日 B 小浜区長・大澤俊雄さん(小池ひとみさん一部同席)、大矢根、磯部 於あたご荘

隣の鮎川から50人ほどの漁民が石巻市街に移り住むことになったウラ事情や半島への影響について、また、「宮城県青年の船」で航海を共にした県内各地の友人から震災時、次々に支援の手が差し伸べられた話などを伺った。

注

- 1) フィールドである小浜においては、阿部市太郎さん宅にはしばしばお邪魔している。2023年夏、これまで筆者に浜や漁のあれこれを教えてくれた小浜の重鎮、市太郎さんが亡くなった(享年96)。この四半世紀以上、阿部家を基点に小浜で多くのことを学ばせていただいた。ご冥福をお祈りする。
- 2) 住民(市民)運動論における作為要求型、作為阻止型については、樋口他 1998を参照のこと。
- 3) 特に昭和三陸地震津波(1933年)後の復興過程では、戦後の高度経済成長期につながる中長期的な基盤再整備の事業展開の中で、モータリゼーションに即して浜を縦断する県道が敷設される際に、いくつもの集落がそのルートから外されて、人の認識風景から消されて来た。今震災に際しては、平成合併前の半島の政治的経済的中心・町役場の置かれていた大原地区が、県道バイパスが敷設されてスルーされることとなり、人の認識から消されつつある。
- 4) 被災直後、市街地にある石巻市役所本庁では周辺の緊急対応に精一杯で、道路が寸断された離半島部には目が行き届かず、公的な対応は進められなかった。それらは地元自身の手で、あるいは何とか知己を訪ねてきた別居親族ら、あるいは、公的施策が及んでいないことを認知した国際NGOの直接介入によって進められた。浜では、倒壊家屋や車両等の瓦礫撤去を、漁師自らがフォークリフトを使って、あるいは漁網を打って行った結果、2023年晩秋現在、

流消失家屋の（倒壊した木造家屋の瓦礫は整理されたもの）コンクリート基礎などがむき出しのまま放置されていて、街区の整備はまだ手が付けられていない。

- 5) 筆者らは、浜の調査でお世話になっている阿部家の親戚が経営する民宿「あたご荘」を定宿としている。浜の、民宿の再興事情（津波で一階部分をぶち抜かれて大破した）を眺めつつ、実習合宿実施のタイミングを相談してきた。浜には「あたご荘」（津波で被災している）のほかに「めぐろ」「後山荘」（いずれも高台にある）の三つの民宿がある。「あたご荘」は被災直後から浜の支援にかけつけたボランティアの集う場となっていて、ここに滞在した大工ボランティアによって修復・補強して再建を果たした。（家屋解体・撤去せずに）修復再建したことで住み続けることが可能となり、低地でありながら災害危険区域に設定されずに済んでいる。
- 6) 当時のTV番組概要は、以下を参照。
https://www.2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009010491_00000
- 7) 丸括弧内の年月日はインタビュー日時。巻末の付. 参照のこと。以下、同様。
- 8) 水道の水圧が低いために大澤家は自宅敷地内に水1,000リットルが入る貯水槽を設置していたことから、被災後も飲み水や風呂水を賄え、近くの鮎川浜の子どもたちを招いて風呂に入らせることも出来た。
- 9) インタビュー実習は、引き続き感染防止の観点から風通しのよい空間で、聞き手は最大3、4人程度、1時間以内とし、PCR検査証携帯、マスク着用を原則に取り組ませた。
- 10) 南三陸町観光協会の南三陸観光ポータルサイト内『この言葉もか? 「南三陸（地域）の方言」紹介』https://www.m-kankou.jp/mina_repo/208753.html/にある「南三陸町弁講座（基本編）」
https://minamisanrikushien.blogspot.com/2011/04/blog-post_20.html 参照。
- 11) 後出の図1に示されている言葉を以下、**ゴチック太字**で表す。なお本稿中に現出しない言葉も、巻末の付. に示すインタビューの文字起こしテキストで確認できる。
- 12) 震災前の小浜の地図は浜の周辺に田畑が広がっていたことを示しているが、今は災害危険区域に指定されたこと

もあって荒地となっている。幸恵さん明美さんの父、アナゴ漁師だった大志さん（84）によると、子供のころ阿部家では、漁業のほか稲作をしたり、豚を飼ったりして暮らしていたという。

- 13) 今では30軒以上が手掛けているワカメの養殖について盛さんは、自分が教えたのではなく、手伝いをした人たちが見よう見まねで試みて、広がっていったとしている。
- 14) 浜では、人を誉める際に「働き者」を意味する「**骨惜しまない人**」、「**辛抱な人**」という表現を使う。特に中高年の人たちは、子どものときから海藻を採ったり、カキの殻を捨てる手伝いをしたりして小遣いを稼いでいたと話す。そして70歳や80歳になっても同じように、自分にできることをして稼いでいる。
- 15) 養殖ワカメの作業に来ていた山形の人々の勧めでキクラゲ栽培を始め、生と天日干しの商品を石巻中心部の産直などで販売し、6次産業化を体現している。
- 16) 小浜の人たちは、地球温暖化に伴う海水温の上昇がワカメやカキの養殖に影響を及ぼし始めていることを心配しつつも、沿岸に現れるようになった南方の魚種、イセエビやワタリガニの漁も手掛けて収入につなげるなど、柔軟かつ強^{したた}かに対応しようとしている。
- 17) このような状態でも大澤さんは、「小浜の消防分団は、他の行政区で定員の半分や3分の1程度しか満たしていないのに対し、唯一定員に達しているんです。まとまるときは、まとまるんですよ」と胸を張る。
- 18) 2022年秋の養殖ワカメの種付け時期に、ある水産会社を経営する夫婦2人が事故で入院するピンチに直面したが、浜のひとたちが二人の穴を埋めて春の収穫につなげたのも一例だ。
- 19) 例えば、200海里規制前には大型漁船で遠洋に出ていた者（オホーツクから南太平洋、さらにはインド洋、大西洋、地中海まで）が規制で船を失い浜の地先漁（アナゴやアワビや、そして養殖）に就くこととなった。生涯の知己が海外にたくさんいる。
- 20) 牡鹿半島の先端の金華山、山形県最上地方の出羽三山は、青森県の恐山とともに「東奥三大霊場」（金華山黄金神社 HP: <https://kinkasan.jp/about/yuisyo/>）として知られている。